

楠志会万歳

古賀勝喜

時の流れの速さをしみじみと感じています。佐賀大学工学部土木工学科に採用して戴きましたのは40年前の1972年1月でした。当時の土木工学科は創設されて2年ほどしか経ってなく、教職員の数は7名で私が8番目ではなかったかと思います。4月に高田・石川・渡辺の3先生が赴任され、6月には岩尾先生が着任されて、土木工学科の創成期の教員が揃いました。講義科目も構力、土質、水理の三力を中心に鉄筋コンクリート、土木材料、土木計画など土木の基本的な科目が中心だったと思います。私は測量実習の担当助手として採用して貰いました。以来、測量に関する教科を担当してきました。器械器具の更新は予算の関係で殆ど行えませんでした。そのような中で森林公園の地形測量は楽しい実習として行う事が出来ました。近年では測量もコンピューターを取り入れた器械器具が開発され、その内容も大きく様変わりしています。特に G.P.S. やトータルステーションと称される器械は従来のアナログデータからデジタルデータへと変わり、測量の精度向上と簡便化をもたらしていることはご承知のことと存じます。学科も漸くトータルステーションの器械を購入でき、デジタル測量への対応がとれる状態と成りつつあります。

研究面では師事しました荒牧教授の下、土木構造物の動的な問題に係りました。初めの数年は地盤の減衰定数や地盤反力係数を実験から求めることに取り組みました。地盤反力係数は実験による再現性の問題から確定できませんでしたが、軟弱地盤である有明粘土の減衰定数の値はどうか確定する事ができました。その他、地盤のせん断波速度の調査を行い、佐賀平野におけるせん断波速度の分布図を確定できました。その後はコンピューターの普及とともに FEM による解析が主と成りました。解析を手掛けた構造物として盛土構造物の静的・動的解析や橋梁の動的解析でした。ピオ型圧密方程式を用いて開発された CRISP と称されるプログラムを多く利用しました。

大学の国際化に伴い、外国人教員や留学生の数も増えました。有限要素法の分野で世界的にも有名な S.バリアパン教授が赴任され、英語での授業が学科で行われ学科の国際化が一気に広がり、大きなカルチャーショックを受けたことが懐かしく思い出されます。留学生の数は佐賀大学の方針で1教員1留学生を基本に300人程を受け入れる計画が示されました。留学生の増加に伴い、留学生担当教員として全学的な留学生受入機関が無い時期に工学部の留学生対応に深く関わってきました。

楠志会の活動は初期の時点から見てまいりました。10周年、20周年、30周年と10年毎の行事が継続されている事に役員の皆様の熱意を感じています。会の維持には大変な努力が必要と思いますが粘り強く頑張ってもらいたいと思っています。微力ですがお手伝いできればとも考えています。2014年には40周年を迎えると思いますので、記念行事が行われる事を期待しています。終わりに楠志会と都市工学科の益々の発展を祈念致します。

(2012年3月)